様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１００５

研究課題名（和文）東日本大震災後の東北沿岸被災地における生活綴方・作文教育実践に関する調査研究

研究課題名（英文）Survey and research on composition and educational practice in the disaster area of the Tohoku coast after the Great East Japan Earthquake

研究代表者
土屋　直人（Tsuchiya, Naoto）

岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０３１８７５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　東日本大震災後の東北沿岸３県の被災地での生活綴方・作文教育実践の実態とその展開過程を調査し、その意義を検討した。特に、岩手県宮古市及び釜石市における被災地教育実践に取り組む複数の小・中学校教師、また、宮城・東松島市の中学校教師・制野俊弘氏や、福島・南相馬市の小学校教師・白木次男氏に、複数回の聴き取り調査・資料収集を行い、地域に根ざした教育実践、いのちを考える授業、総合学習や生活綴方実践等の実際を確かめた。あわせて関連文献目録を作成した。
　特に福島の小学校教師・白木次男氏からは、学級文詩集実践を基軸に据え、目の前の地域現実の「リアルな姿から自分の考えを鍛え」る教育実践の実像を詳細に学び得た。

研究成果の概要（英文）：Throughout the three years, I have surveyed the actual practice of "composition" educational practice and its development process which is being carried out in the disaster areas of the three Tohoku coast areas after the Great East Japan Earthquake. I participate in various study groups, conduct listening surveys, collect records, empirically analyze the reality of educational practices of the Tohoku coast, analyze the significance of those activities.
I especially focused on Tsugio Shiraki, an elementary school teacher in Fukushima Prefecture. While encouraging children to write down the facts of their lives, he was doing educational practices to support capturing the reality of areas where nuclear power plant accidents occurred.

研究分野：社会科教育学

キーワード：東日本大震災　教育実践　生活綴方　作文教育　北方性教育運動

１．研究開始当初の背景

これまで、東日本大震災後の東北の被災地における子どもの「作文」、被災地での生活綴方・作文教育実践に着目した教育学的研究には、例えば田中孝彦氏、片岡洋子氏らの研究があった。田中氏は臨床教育学の立場、生活綴方研究と「子ども理解」の観点から、震災後の子どもの作文から学習への問いと要求が読み取れるとし、子ども観・教育観の問い直しを提起している。片岡氏は、TV ドキュメントの番組で取り上げられた岩手・大槌の女子小学生とその父親、担任教師の悲嘆、ライター・森健氏（『「つなみ」の子どもたち―作文に書かれなかった物語―』文藝春秋・2011）の取材など彼女を取り巻く大人たちの言動を総合的に検討し、「被災体験を語る」困難を考察している。（〈参考文献〉：田中孝彦『子ども理解と自己理解』2012、片岡洋子「子どもたちは誰に表現しうるのか―メディアが伝えた子どもたちの震災体験をとおして考える―」日本作文の会『作文と教育』№792・2012.8、ほか。）

ただし既往研究には〈東北から〉の視座が弱く、問題関心の軸足と考察の起点を「東北」に据えた研究が乏しい側面がある。例えば片岡氏は白木実践への北方性教育運動という視点からの検討には立ち入っておらず、田中氏にも「東北の教育実践」への問題関心が弱いと考えられる。

筆者は数年前より、民間教育実践史への問題関心から、東北における生活綴方教育実践、戦前東北に生まれた「北方性教育運動」の戦後的展開等を研究すべく、学級文集等の資料発掘収集・検討や実践者への聞き取り調査等を実地に継続してきた。また以前、東日本大震災発生直後に開始した科研費「基盤研究(C)（一般）」をうけ、特に北方性教育運動の流れを汲む、震災後の東北各地での現今の生活綴方実践等の実際についての調査に入った。その研究成果の一部は既に論文として発表した（土屋直人「地域に生きる『生活者』としての子どもと学力―北方性教育運動の視点から―」『教育』2013 年 7 月号）。

筆者はその一環で、震災後これまで日本作文の会や「東北作文の会」等の研究集会、「東北民教研」（東北地区民間教育研究団体合同研究集会）の「作文と教育」分科会等での、生活綴方・作文教育実践を行っている被災地の教師たちの実践報告と厳しい質疑討論の場に参加し、被災地の子どもの生活現実、子どもに寄り添う営みの実際、その苦難と希望を述べあう「語り」を聴いてきた。そこでは生活綴方実践に何を願い、何を託しているかが語られていた。この現場教師たちとの交流と実践報告の聴取を通して、東北の被災地の実践者と「生活綴方」実践報告、教師たちの語りを具体的に聴きとりその実践の実態と意義を確かめ、そこに内在する教育学的知見を検証する、地域に根ざした本格的な継続的研究が（一層）必要であると考えた。

２．研究の目的

本研究は、震災後東北の沿岸３県の被災地において創造されている生活綴方・作文教育実践に焦点を当て、津波被災・「原発震災」という困難な状況の中で、いま被災地の地域的課題と実践的課題に教師たちはどう向き合い、いかなる意図からいかに自らの生活綴方教育実践を切り拓いているのか、その実態と展開過程等を調査し、その有する意義などを考察することを目標とする。すなわち、東北の被災地で生活綴方・作文教育実践を現に行っている実践者らの具体的な営みの実像を明らかにし、その実践が含み持つ（歴史的）意義を探ることを通して、震災後の「教育」の再考に示唆をもたらす教育学的知見を見出し、今後における生活綴方教育実践の可能性の解明を目指すものである。

本調査では、実践記録や子どもの作文等の第一次資料を収集・分析検討しつつ、一人ひとりの教師の声を聴きとる中で、実践の内実を確かめ、その展開過程に実証的に迫り、その意義を考察し、示唆を明らかにする。また、既往科研費研究を継続・発展させ、昭和戦前期東北の地で生まれ、戦後に続く教育文化遺産である「北方性教育運動」の精神が、震災後、沿岸被災地の現場教師やその生活綴方実践の中にいかに継承されているか、そしてその持つ意味とは何かを広く検証・考察する。

なお、ここにいう「生活綴方・作文教育実践」とは、国語科という教科の枠内での文章表現指導や「行事作文」等の単元指導に限らず、生活を綴ることを通して生活認識と現実把握を深め、その綴った作文等を学級で読みあい互いのものの見方・考え方を深めあい、生きかたを問い「生活意欲」を高めてゆく実践など、広い意味での生活教育（あるいは学級づくり、生活指導）としての「生活綴方」教育を含んだ営みとして捉える。本研究では特に後者を対象の中軸に据える。

上記の通り、被災地での教育実践そのものを対象とした実証的・総合的な調査、教育学的観点からその意義を考察し、今後に提起する示唆を探る本研究は、「〈3.11 後〉の教育実践研究」として、震災後の日本の社会と政治、教育をめぐる現実的課題を検証・解明する作業につながる価値のあるものである。本調査研究からは、社会と子どものさまざまな困難の中で、震災後に日本社会が問われている社会的政治的諸課題（原発問題、等）に教育がどう向き合うかという、3.11 後の教育（学）に課された大きな課題への示唆が浮かび上がるものと考えられる。

３．研究の方法

研究の手続き、方法については、以下の 4 つの側面・作業を、並行・関連させながら、

順次進めた。
（１）文献講読（著書、教育雑誌等の実践論文）等の基礎的研究
第一に、基礎資料として、本研究課題に関係する、これまで公刊されてきた図書（東日本大震災とその後に関する記録（著書）や、日本作文の会等の戦後民間教育実践、実践記録など）、また教育関係雑誌の論文等の諸資料を収集・講読し、文献を通して基礎的事実を把握・整理し、被災地の地域実態の調査や、現段階での教育実践（及び研究）のトータルな動向とその特質を確認する。
（２）研究集会等への参加、実践の実態把握、実践報告資料等の収集
第二に、教師たちが集う研究集会に参加し情報収集を行った。年 1 回の「東北民教研」（「作文と教育」分科会等）や「東北作文の会」等の地域研究集会、東北各県の作文の会の集会等のほか、各民間教育研究団体の全国研究大会や県大会、各県・支部等の教職員組合の「組合教研」集会等にも複数出席・参加し、分科会等で東北の教師の実践報告と討論を聴くことを通して、実践動向や議論・論点の動向、現場教師の教育実践の実態把握を行う。あわせて、全体会・分科会で実践報告資料等の関連の第一次資料、基礎資料を収集する。
（３）現地（東北３県の各地域）に赴いての実践者への聞き取り調査と第一次資料収集
第三に、被災地等の沿岸小・中学校（あるいはその近郊）の現地に赴いての、小学校・中学校の実践者（震災時沿岸に在職し現在内陸等に転出、あるいは退職した教師も含む）への個別の聞き取り調査の作業を行う。そしてこの聞き取り作業とあわせて、日記や作文・詩、学級文集や学級通信、実践記録、実践報告資料、教師のノートや手記等の第一次資料について、先方に関連資料の存在（有無）・種類を聞き、閲覧を求め情報を収集する。
（〈参考文献〉:『東北民教研作並集会記録集』2012、『東北民教研花巻集会記録集』2013、宮城県教職員組合編『東日本大震災教職員が語る子ども・いのち・未来―あの日、学校はどう判断し行動したか―』（明石書店、2012）、岩手県教組教研集会報告書、ほか。）
（４）各実践についての実証的・総合的な分析検討、全体的な考察、研究成果の公表等
上記の調査から得られた諸事実に立った実証的な分析検討・考察、その研究成果の公表を行うことを試みる。諸論点の整理とあわせて、考察の視点・課題、論点には、特に、震災後の生活綴方・作文教育実践における北方性教育運動の継承（発展・連続性）の如何、等の点をも、視野に入れる。被災地の子どもたちが書き記した日記・作文等の作品、学級文集等を教師とともに吟味し、そこに表された生活の背景や地域社会の実態の把握・検討を含めて教育学的に検討し、災害後の子どもの「語り」と作文教育の意義、生活「表現」を励ます実践意図とその意義を探る。
そして、（１）で購読した文献とあわせて、収集資料を整理した上で、文献目録等を作成する。

４．研究成果

調査・研究にあたったおよそ 3 年間を通して、3. 11 東日本大震災後、東北沿岸３県の被災地において行われている生活綴方・作文教育実践等の実態とその展開過程、その意義を総合的に考察することを目的に、東北沿岸の教育実践の営みの実際を実証的に分析すべく、研究会参加や聴き取り調査を通して情報収集を行い、それらの営みの有する意義についての一定の分析・考察を試みた。

（１）現場実践報告・実践動向・展開の蓄積・検討
その成果としては、第一に、研究集会等への参加、実践の実態把握、実践報告資料等の収集を進めるべく、教師たちが集う研究集会に参加し、多様な教育実践の事実を収集・蓄積し得たことである。具体的には、「東北民教研」集会（全体会及び「作文と教育」分科会等に参加）や、教育科学研究会全国大会、「東北作文の会」研究集会、岩手県教職員組合研究集会、「岩手民教研」集会等の複数の教育研究集会に出席・参加し、実践報告と討論を聴き討議に参加し、生活綴方実践の動向や課題・論点の動向、実態把握に関する情報収集を行い、東北沿岸被災地および東北各地域での現場教師の教育実践の営みの一端を学び得た。（その具体的・系統的な内容分析、全体的な考察は現在進行中であり、近日学会報告等にて発表の予定である。）

（２）東北沿岸被災 3 県の教育実践の動向、白木氏・制野氏らの作文・生活綴方等の教育実践についての調査・検討
第二に、特に岩手及び宮城、福島における教育実践の営みについて、特に、岩手県宮古市及び釜石市における被災地教育実践に取り組む複数の小・中学校教師、また、宮城・東松島市の中学校教師・制野俊弘氏や、福島・南相馬市の小学校教師・白木次男氏に、複数回の聴き取り調査を行い、被災地における地域に根ざした教育実践の実際、「いのち」を考える授業、総合学習実践や、生活綴方実践等の実際を、実地に当事者の声から学び、なおかつ教育実践記録・研究会報告資料等の借用と説明を得ながら、被災地域の教育実践の実像を学んだ。それらの教育実践の努力の底流には、東北の昭和戦前期以来の北方性教育運動が明瞭にあったことが確かめられた。
具体的には、とりわけ、福島の白木次男氏については、複数の現地調査と聞き取り、教育実践記録（手記）や学級文詩集等の資料収集を通して、福島原発事故後の、南相馬市における教育実践の実際を取材したなかで、原

発災害のもたらした甚大な困難に向かう教育実践の実像と、実践の前進・実質化に内包される厳しさ、そして社会問題としての原発問題の大きさ、その落とす影の深刻さの一方、その営みの過程から、一人の小学校教師の、地域の教師としての生き方、教育実践への取り組みへの苦渋の思いと模索、見通しが持てない中での格闘の足跡を確かめ得た。特に白木氏の一連の生活綴方・学級文詩集実践の、2013・2014 年度の展開の一端に迫るべく検討を行った。学級文詩集実践を基軸に据え、目の前の現実の「リアルな姿から自分の考えを鍛えて」いき、生活から現実をとらえ考える力、地域の現実からものを見ることを励まし、子どもの実感的な生活認識・社会認識を育て、人間らしさとは何か、平和・いのちの意味を希求する基盤を養っていくという、明瞭な志向を有する白木氏の実践から、地域・社会の現実の中での、己の「生き方」を、そして未来の社会（の変革）への展望を、教育という「希望」のなかで問い学ぶことを求める、教育の原理の一つの典型（原型）が読み取れた。

なお、被災地において生徒に作文を書かせて子どもの内面に迫り子どもに寄り添うことを試みてきた宮城・制野俊弘氏からも、作文を書かせる教育実践についての聞き取り調査、及び生徒の作文等の関連資料収集を行うことができた。津波被災後、「心の闇」を抱えながら、生徒が自らのことばで（津波での肉親との死別、暮らしの中での苦難等の）心の内を語ること、書き記すこと（表現）から命を問い返すことを、「いのちの授業」の展開のなかで保障する制野氏の営みの内実を確かめ得た。（その実践展開の詳細な検討・分析は以後に発表を予定している。）

（３）東北被災 3 県沿岸の地域教育実践に関する文献一覧・目録の作成・公表

そして研究成果の第三として、3・11 大震災後の東北沿岸における教育実践の展開の実際を探る基礎資料を作成すべく、震災発生直後からそのおよそ 5 年後までの間、東北沿岸 3 県における現地の教師等が書き綴った教育関係雑誌論稿等の文献一覧の作成・公表を行った。3･11 震災後、複数の教育関係雑誌には、被災地の子どもと学校・教職員の折々現状や、とりまく課題の現実、津波・原発被災のなかの学校と地域の人々の苦境と受苦体験、その中での教育実践へ向けての格闘、あるいは問題提起等を、現場教師等が書き記した多様な論稿が、数多く掲載されてきた。これらの報告や記録からは、3･11 後、その地域に生きる教師たちはどういう教育実践をどういった状況の中で創ろうとしてきたか、その仔細の現実を窺い知ることができる。特に被害が甚大・広範に及んだ東北被災 3 県（主に岩手、宮城、福島）等の教師・教育関係者たちの、現地の状況等の報告記事や、学校等における教育実践等を記した論稿（2011 年 6 月頃月以降、2016 年末までの約 5 年半の間に公開されたもの）を抽出し、その書誌を県別に、時系列に沿って年度ごとに整理・記述し、それらを列挙した一覧を、文献一覧・目録のかたちで示した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計７件）

① 土屋直人、「3・11 東日本大震災後の東北 3 県沿岸被災地等における地域教育実践の展開について―現地の教師等が書き綴った教育関係雑誌論稿等の文献一覧の作成から―」、『岩手大学文化論叢』（岩手大学教育学部社会科教育科）、査読無、第 9 輯、2017、149-172 頁。

② 土屋直人、「震災後の福島・白木次男の総合学習実践と『生活綴方』・学級文詩集―原発災害のなかで、地域の生活現実を書き綴らせることの意味―」、『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』、査読無、第 16 号、2017、125-143 頁。
https://iwate-u.repo.nii.ac.jp/

③ 森本晋也・土屋直人、「震災を生き抜いた子どもたちが学んだ津波の歴史と防災―地域に学ぶ教育実践の記録・釜石東中学校（１）―」、『岩手大学大学院教育学研究科研究年報』、査読無、第１巻、2017、95-113 頁。
https://iwate-u.repo.nii.ac.jp/

④ 土屋直人、「岩手沿岸地域の子どもと学校の現実―ある教師の模索から考える―（シリーズ震災と教育 第 15 回）」、『季刊人間と教育』（民主教育研究所）、査読無、№92、2016、120-127 頁。

⑤ 土屋直人、「『社会参画に向けた力』を育成する教材のあり方―小学校６年生社会科政治単元の〈社会参加〉学習の課題―」、『小学社会通信　まなびと』（教育出版）、査読無、2015 年春号、6-11 頁。
http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/

⑥ 土屋直人、「原発災害のなかの生活綴方実践と『社会科学』―白木次男氏の報告から考えること―」、『教育』（教育科学研究会）、査読無、№824、2014 年、100-103 頁。

⑦ 土屋直人、「震災後、『政治教育』を問い直すために―岩手三陸沿岸の被災とその後から考える―」、『民主主義教育 21』（全国民主主義教育研究会）、査読無、Vol.8、2014 年、138-147 頁。

〔学会発表〕（計３件）

① 土屋直人、「震災後、生活綴方実践と『表

現』の意味を考える―福島・白木次男氏の営みの展開に着目して―」、日本臨床教育学会第 6 回研究大会、2016 年 9 月 24 日、立命館大学衣笠キャンパス（京都府京都市）

② 土屋直人、「生活綴方と社会科・公民教育―3･11 震災後、公民教育（史）を問い直すために―」、日本公民教育学会第 26 回全国研究大会、2015 年 6 月 13 日、高千穂大学杉並キャンパス（東京都杉並区）

③ 土屋直人、「震災後の地域教育実践、生活綴方教育への一考察―佐々木昂の「個のリアリテ」論の一端を読みながら―」日本臨床教育学会第 4 回研究大会、2014 年 9 月 27 日、みやぎ教育文化研究センター・フォレスト仙台（宮城県仙台市）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
（特になし）

６．研究組織
(1)研究代表者
土屋　直人（Tsuchiya, Naoto）
岩手大学・教育学部・准教授
研究者番号：10318751

(2)研究分担者
（無）

(3)連携研究者
（無）